

Ⅶ はじめに

本書は、子どもたちが回り道や失敗を重ねながら発達していくプロセスについて、私たちの生活や世の中で起こっていることに触れながら、綴ったものです。保護者のみなさん、教師・保育者の方々、発達にかかわる仕事をめざす学生さんを「お話相手」に、生活の身近なところから、子どもの発達について具体的に語ったエッセイ風読み物です。読まれた方々が、子どもの輝いているところを見つけて、子どもたちから元気をもらうきっかけになればと思います。また、実践や子育てのなかで、「行きづまり」を感じたとき、本書が、子どもの願いに心をよせる第一歩となることを願っています。

私は、学生時代から、保育園・幼稚園や障害児教育の現場の先生方と出会い、子どものかわいらしさやおもしろさ、そして人間の発達の力強さを教えてもらってきました。本書では、保育・障害児教育の実践から直接に、あるいは実践記録などを通して学んだ子どもの姿に触れながら、人間の発達をとらえるイメージをいっしょにつくりあげていきたいと

思います。描かれている子どもの姿や実践は、日常のありふれたものに感じられるかもしれませんが、そうした事実をていねいに見て、日々の生活をゆったりじっくり過ごすなかでこそ、子どもは発達していくことをあらためてお伝えしたいと考えています。

私たちが住んでいる社会では、経済効率を重視し、何ごとにも自己責任が強調されています。二一世紀を迎えて、その傾向が強まっているように思います。それは子育てや教育・保育の世界も例外ではありません。その結果、とにかく、みんな忙しくなっています。しかも、子どもたちに直接かわからないところでの仕事が増えているのです。家庭においても、保護者の方々の労働実態は厳しくなり、子どもと向かい合う時間的、精神的余裕がなくなってきた状況が生み出されています。

そんななか、子どもたちのすることが「めんどうな」こととして受けとめられる社会的風潮があるように思います。さっさと行動しないし、泣いたりぐずったり、うるさくて、わざと反対のことを言ったりなど、非効率な存在として疎んじられることが多くなっています。そうしたマイナスの行動を即刻コントロールするのが、親や教師・保育者として真っ先に期待されることになっているように思います。

子どもの発達に共感しにくい状況が広がっているのです。でも、子どもにはそれなりの思いがあり、いろんな悩みをかかえているのです。障害を

もつ子どもたちの場合、その悩みがより強まることもあります。子どもの発達を学ぶのは、子どもたち一人ひとりの願いや悩みを想像するためです。そうしてちよつとでも、子ども心に触れられたとき、子育てや実践のエネルギーが貯えられていくように思います。

では、どうぞ肩の力を抜いて、あれこれ子どもの姿を想像しつつ、身近な子どもさんと重ねながら、本書をお読みください。

そして、ゆったりじっくり子どもたちと向かい合い、「子どもの発達に共感するとき」を増やしていただければと思います。

